

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320122

研究課題名(和文)教育・ビジネス現場のELF(共通語としての英語)使用実態調査と教育モデルの構築

研究課題名(英文)The Use of English as a Lingua Franca (ELF) in Academic and Business Contexts in Japan &#8211; An analysis of its use and implications for language education

研究代表者

村田 久美子(MURATA, KUMIKO)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：10229990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主な成果は 共通語としての英語(ELF)概念理解の深化、ELF使用実態の解明、これに基づいたELFに対する意識変革と教育への示唆の3点である。 に関しては様々なワークショップ開催とこれに基づく Working Papers の発刊によることが大きい。 に関してはデータ収録・分析により、様々な教育・言語・文化背景のELF使用者がいかに協力的にコミュニケーションを行っているかを解明、この研究結果に基づいた意識改革も着実に進み、学会発表、出版等により研究結果の教育への示唆についても積極的に取り組んでいる。ELF研究者も増加しており、更なる意識変化浸透への布石となっている。

研究成果の概要(英文)：The contribution of the current research is classified into the following three: the deepening of understanding of the concept of English as a lingua franca (ELF), detailed description and understanding of the use of ELF in actual situations and heightening awareness of the use of ELF and implications for language pedagogy. The first has been mainly achieved by holding various workshops and publishing working papers based on them. The second has been made possible by collecting and analysing various types of data from diverse ELF users in their use of ELF and by showing how cooperatively and successfully they achieve their communicative needs. Thirdly, disseminating these results and their implications by way of conference presentations and publications has contributed to heightening the awareness of people about ELF and to furthering pedagogical implications.

研究分野：応用言語学、共通語としての英語(ELF)、談話分析、会話分析、語用論、言語教育

キーワード：応用言語学、ELF、英語教育、ESP、社会言語学

1. 研究開始当初の背景

過去 10 年ほどで共通語としての英語 (English as a Lingua Franca, 以下 ELF) 使用の状況は大きく変化した。これは経済分野でのいわゆる BRICs といわれる国々やこれに続く VISTA (ベトナム、インドネシア、南アフリカ、トルコ、アルゼンチン) 等の国々の目覚ましい台頭と無関係ではない (Graddol 2006、日経新聞 2009.10.24)。これらの諸国の人々と第 3 国の人々のコミュニケーションは、主として英語非母語話者同士の共通言語としての ELF のコミュニケーションである。日本の企業もいち早くこの流れに対応し、社内言語を英語にする会社も増加傾向にあり (日経新聞 2010.7.8)、文部科学省も大学教育の国際化を謳い、英語での教育を奨励し (MEXT 2002, 2009 年, 西村 2010)、現時点でもこの傾向は更に強まっている。その反面、国内外でこのように急激に増加している ELF 使用の現状を、日本人 ELF 使用者に焦点をあて、実際にその使用の現場で録音調査している研究は本研究開始の時点でまだ殆どなかった。また、従来の ELF の研究は、ELF 使用に関する意識調査を中心としたものが多かったが (Jenkins 2007, Matsuda 2002, 2003)、本研究では ELF 使用の実態調査をビジネス及び高等教育の現場で録音という形で行い、会話分析、談話分析的手法及び民俗誌学的な視点も取り入れつつ、特にディスコース、プラグマティックレベルでコミュニケーション上の問題点に注目しながら詳細な質的分析を行い、実際の ELF 使用場面で何が起きているかを事後インタビューで調査し、ELF コミュニケーションで求められている英語力とは何かを解明し、英語教育に積極的に貢献しようとするものであり、その意義は深い。

国際語としての英語 (EIL) の研究は、英語の母語・非母語話者のコミュニケーションを中心とした研究から、特に 1980 年代に入り世界の英語 (WE) という形で、異なる英語種の調査とその使い手のコミュニケーションの研究へと枠が広がり (Brutt-Griffler 2002; Jenkins 2003; Kachru, B.B.(ed.) 1982, 1985, 1990, 1995, 2009; Kachru, Y. & Nelson (eds) 2006; Kirkpatrick 2007; Smith 1976,(ed.) 1983, 1992; Strevens 1982, 1992; Widdowson 1994, 1997; Yano 2001, 2008, 2009)、更に過去 10 年程は ELF の研究へと発展している。ELF コミュニケーションの主体者は主として今まで英語の非母語話者とされていた人々で、例えば、日本人とベトナム人、中国人、ブラジル人等が英語を共通語として商談や研究を行う例である。このようなコミュニケーションは本研究開始以前の数年で格段に増え、今後益々増加すると予想される。

ム人、中国人、ブラジル人等が英語を共通語として商談や研究を行う例である。このようなコミュニケーションは本研究開始以前の数年で格段に増え、今後益々増加すると予想される。

ELF の研究は特にヨーロッパを中心に研究開始以前の過去 10 年ほどで目覚ましい発展を遂げている (House 2003; Jenkins 2000, 2002, 2007, 2009; Seidlhofer 2001, 2003, 2004, Seidlhofer & Widdowson 2009)。研究代表者は特に日本人英語使用者の異文化コミュニケーションにおけるコミュニケーション能力に一貫して注目して研究を続けており (Murata 1993, 1994, 1995, 1998, 2001, 2004, 2007, 2008)、2009 年には特にアジアのコンテクストでの英語使用に焦点を当てた研究書を J. Jenkins と編集し、研究を深めている (Murata & Jenkins (eds) 2009)。本研究では、収録したデータを特に (1) ディスコース・プラグマティックレベルでの相互作用に注目しつつ、会話・談話分析の手法を用い詳細な質的分析を行うと同時に、事後インタビューによる意識調査等も取り入れ、多面的且つ多層的な視点より (2) グローバルな ELF コミュニケーションで必要とされる能力を検討し、これに基づき、(3) 具体的に今後の英語教育で取り入れるべきモデル、及び、カリキュラム、方法、教材開発等の面からその示唆を探るものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) 日本人 ELF コミュニケーションの実態を解明、(2) グローバル化が進み、ELF によるコミュニケーションが増加する世界で、日本人 ELF 使用者に求められるコミュニケーション能力とそのモデルは何であるかについての具体的、且つ、現実的な ELF の到達モデルの枠組みの策定、(3) こうしたことを前提にして実際に求められる英語とそのコミュニケーション能力育成の為の具体的な英語教育への提案を行うことである。方法は主として高等教育とビジネスという二種類の ELF 使用場面に焦点をあてた録音調査とその詳細な質的分析に加え、学生へのインタビューも実施し、意識と使用の双方からのアプローチを試みつつ、主として以下の 4 点を明らかにする。

- (1) ELF に関する既存研究の実態把握と問題点の洗い出しと検討
- (2) ELF コミュニケーションの実態録音調査 (ビジネス及びアカデミックコンテクスト録音調査及び事後インタビュー) と質

的分析、これに基づいた具体的且つ現実的な ELF モデルの検討

- (3) ELF コミュニケーションの意識調査（インタビュー調査・学生）と詳細分析、ELF モデルの検討と(2)の結果も含めて考慮した意識改革の方法
- (4) 上記(1)-(3)の結果を有機的に結びつけ、今後必要とされる具体的且つ現実的 ELF コミュニケーション能力の策定とこの ELF 使用の現実を踏まえた能力育成の為の英語教育への具体的且つ実現可能な提案

3. 研究の方法

本研究では次の方法を用いてデータの収集及び、調査・分析を行なった。

- (1) ELF の既存研究、あるいは現在進められている研究の詳細な調査・検討と国内外の研究者との意見交換、及びワークショップ開催による研究の深化（主として H23・25 年度）
- (2) 日本人の ELF コミュニケーション現場での実態録音調査（ビジネス及び大学教育での ELF 使用場面で録音と事後インタビュー）（主として H23、及び H24）
- (3) ELF コミュニケーションとこれを到達目標とすることへの意識調査（学生へのインタビュー）（主として H25）
- (4) 上記 (1)-(3)の結果を有機的且つ総合的に踏まえての具体的且つ現実的 ELF コミュニケーション能力の策定、及び、具体的な英語教育への提案、及び国際シンポジウムの開催 (H26)

本研究は ELF コミュニケーション現場での実態録音及びインタビュー調査を含む為、アカデミック、ビジネス各々の分野で教育・研究に密接に関わっている学内外の研究者に分担者、連携者として参加して頂いた。また、本研究では ELF 研究で国際的に活躍している海外研究者に共同研究者としてワークショップ等に参加頂き、ELF 研究における理論、方法論の双方での深化を図るとともに、ELF 研究・使用の実態を紹介して頂き、また、本研究後半では ELF コミュニケーションの現状及び将来を語る国際ワークショップに参加頂いた。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究の主な成果は ①ELF 概念の理解の深化 ②ELF 使用実態の解明 ③これに基づいた ELF に対する意識変革と教育への示唆の 3 点

が挙げられる。以下に順を追って、説明する。

① □ELF 概念の理解の深化

理解の深化は 1) ワークショップの開催、これに基づく 2) Working Papers の発刊によるところが大きい。

1) ワークショップの開催

毎年数回の一般ワークショップ開催と同時に(研究期間中合計、9 回)、毎年国際ワークショップを開催、ELF の分野で国際的に活躍する研究者に基調講演をして頂くと同時に、パネル討論、若手も含む ELF 研究者による研究発表での指定討論者としても活躍して頂いた。

H23 年度は 8 月末に第 1 回早稲田 ELF 国際ワークショップを開催、ELF の大規模コーパスと ELF 概念研究で著名なサイドルホフファー、ウィドウソン両教授を基調講演者として招聘、ELF 概念の理解と研究の現状把握を行った。パネルではこの 2 名を指定討論者に久保田竜子教授を特別パネリスト、本科研の分担、連携研究者をパネリストとし、各研究者がそれぞれの分野でのデータを ELF の視点から分析、考察する試みを行い、ELF と多言語主義、言語習得、評価、言語景観などの既存の言語学、応用言語学分野との関連性を検討し、研究の幅を広げると同時に、理解を深化させた。(Murata(ed.) 2012 参照)

H24 年度は H25 年 3 月初旬に第 2 回早稲田 ELF 国際ワークショップを開催、ELF のアカデミックコーパス(ELFA)に基づく研究で著名なモーラネン教授、アカデミック ELF データの談話分析・語用論の視点からの研究で著名なハウス教授を基調講演者、ELF コミュニケーションを語用論の視点から研究しているコウア博士を特別パネリストとして招聘し、ELF 概念理解の深化を図ると同時に、研究方法・成果に関する有意義な意見交換をした。(Murata(ed.) 2013 参照)

H25 年度は H26 年 2 月末から 3 月初旬にかけ、第 3 回早稲田 ELF 国際ワークショップを開催、特に高等教育現場での ELF の研究で著名なジェンキンス教授とビジネスの現場での ELF 研究で著名なイーレンライヒ教授を招聘しアカデミックとビジネス場面での ELF 研究の理解を深めつつ、両分野での ELF 研究の現状把握を行った。パネルでは両者を指定討論者に招き、日本の英語言語政策、及び大学、ビジネス、NPO 等での ELF 使用のコミュニケーションデータを基に、研究分担者、その他の ELF 研究者が発表、討論し、この分野の理解を更に深めた。(Murata(ed.) 2014 参照)

H26年度は11月中旬に第4回早稲田ELF国際ワークショップを開催、海外共同研究者でもあるウイドウソン、サイドルホフファー両教授を研究総まとめ、及び次の研究への橋渡しの意味も含め再度招聘し、またELF研究での評価を検討する為に言語評価で著名なショハミ教授を招聘し、本ELF研究の総まとめとELF評価の視点も取り入れ、これからの研究の展望も検討した。パネルではこの3名を指定討論者に、大学における英語を媒介とした授業(EMI)実践を検討すべく、中国のYing Wang博士を始めとして国内外5名の研究者の参加のもと、各大学での実践を中心に発表、討論を実施した。(Murata(ed.) forthcoming 参照)

2) Working Papers の刊行

ELF概念の理解の深化は上述した一般、及び国際ワークショップの発表論文を中心に編集された *Waseda Working Papers in ELF* に負うところも大きい。これはH24年より毎年1回刊行、現在までに3巻を発行、現在、H26年度の発表論文を中心に第4巻を編集中である(H27年6月末刊行予定)。H24年発行の第2巻以降は全ての論文は英文となり、日本のみならず海外の研究者による参照も増加している。

②ELF使用実態の解明

ELF使用実態調査に関しては、高等教育現場では分担者飯野の協力を得、授業収録、学生インタビュー実施を毎年行い、英語を媒介とする授業(English-Medium Instruction - EMI)という環境の中で、様々な教育・言語・文化背景を持つ学生たちが、ELFを用いながらいかに協力的にコミュニケーションを行っているかを明らかにすると同時に、この過程での学生たちのアイデンティティの変化、ELFによるコミュニケーションへの意識変化、ひいては英語力の捉え方の変化を質的分析で詳細に描写することに成功し、この分析結果はSS19,20、ELF国際学会等の学会で発表すると同時に上述のWorking Papers、及び印刷中の編集本で詳述されている。(Murata(ed.) in press)

教育・ビジネスの場で前提とされている英語標準モデルのテキスト分析では、新聞等のメディアでのビジネス、教育での英語モデル前提に関するデータ収集と詳細分析を行い、グローバル時代を踏まえた英語教育及びELF使用に関する教育・行政面での認識及び実践とビジネス現場でのELF使用の現実との乖離を、メディアディスコース分析を中心にまとめ、この一部は第6回

ELF国際会議で代表者村田が発表した。(Murata 2013)

ビジネス現場でのデータ収集・分析は分担者寺内の協力の下、データ収集が行われているが、詳細分析での情報保護の問題が大きく、新たな企業でのデータ収集が今後の課題であるが、H26年度より分担者となった土屋がシンガポールで新たなデータ収集を行い分析中、また寺内を中心にタイでの新しい協力可能者とH27年度データ収集に向け、現在連絡調整中である。

③上記研究結果に基づいたELFに対する意識変革と教育への示唆

上述の研究結果に基づいた意識改革は着実に進んでおり、主として上述のワークショップへの参加、Working Papersによる理解の深化によるところが大である。これは次項で論ずるインパクトとも関係するが、年々ワークショップの参加者も増え、また、実際に自分のELF研究に基づく発表希望者も確実に増えている。また、学生のELF使用に関する意識も変化しているのが研究結果で明らかになっており、ELFの研究を希望する若手研究者も増加傾向にある。

(2)国内外における位置づけとインパクト

国際ワークショップでは個人発表部門で、ELF若手研究者を中心に発表して頂いているが、毎年その質の高さが増して、発表参加者も、幅広い研究者の発表希望が増加、ELF研究への興味と裾野の広がり、理解の深まりが実感できる。ワークショップはELF研究に興味がある研究者や学生等に広く公開され、特に国際ワークショップでは多くの参加者があり質疑応答も活発で、ELFとELF研究への理解を深めるよい機会となっている。

また、上述した *Waseda Working Papers in ELF* は既に3巻が刊行され、国内外のELF研究者の貴重な参考文献となっている。

(4) 今後の展望

本研究はH26年度に本研究最終年度の前年応募により、新たにH26-30年度科研〔基盤(B)〕としてのスタートを切っている。今後は、近年特に奨励されているEMI(English-Medium Instruction)のコンテキストでのデータ収集・分析を進め、他大学の研究実践者との意見交換等も進めていく予定である。特に従来からのEMI研究者にELFの視点を導入して分析をして頂くことにより、ELF自体への認識も深まると考える。また、ビジネス現場でのデータ収録・分析はいろいろな意味で制約があるが、今後は是非、産学双方のELF使用の実態を把握し、学習者が将来必要にな

る英語力は何であるかの解明を更に進め、この研究から得られた知見を実際の教育現場でどのように生かしていくか、言語政策面、教材作成、教員養成等あらゆる機会を利用して意識を高める具体的活動が必要となる。この過程で、今後も毎年国際ワークショップの開催、Working Papers の発刊を継続していき、国内外の更に多数に研究成果を伝達する方法として国際的な出版社からの出版の可能性も考えていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

- ①飯野公一 (2015) 「根強い『英語ネイティブ志向』と留学先の選択」、文部科学教育通信、359号、pp.18-19.
- ②飯野公一 (2015) 「大学の国際化と言語政策」、文部科学教育通信、357号、pp.22-23.
- ③Murata, K. (2014) Review of *English as a Lingua Franca in the International University: The Politics of Academic Language Policy* by Jennifer Jenkins, *ELT Journal*, 68, 2: 205-207.
- ④Tsuchiya, K. (2014) Why bother switching to ELF?: Analysing code-switching in a group discussion in a CLIL class at university in Japan. *Waseda Working Papers in ELF*, 3: 140-157. (査読有)
- ⑤Tsuchiya, K. & Handford, M., (2014) A corpus-driven analysis of repair in a professional ELF meeting: Not 'letting it pass', *Journal of Pragmatics*, 64:117-131. (査読有)
- ⑥Backhaus, P. (2013) ELF on public transport signs in Tokyo. *Waseda Working Papers in ELF*, 2: 101-110.
- ⑦Harada, T. (2013). Effects of early language learning on speech perception: From an ELF perspective. *Waseda Working Papers in ELF*, 2: 111-122.
- ⑧Iino, M. & Murata, K. (2013). We are jun-Japan –Dynamics of ELF communication in an English medium academic context. *Waseda Working Papers in ELF*. Vol. 2: 84-100.
- ⑨Sawaki, Y. (2013). A review of two large-scale academic English tests from an ELF perspective. *Waseda Working Papers in ELF*, 2, 123-137.
- ⑩Backhaus, P. (2012) Traces of ELF in Japan's Linguistic Landscape. *Waseda Working Papers in ELF*, 1:58-64.
- ⑪飯野公一.(2012) 英語でつなぐ世界の高等教育—SILS のケースを中心に. *Waseda Working Papers in ELF*, 1: 33-41.
- ⑫寺内一 (2012) 企業が求める英語力—ELF 研究への足がかりとして. *Waseda Working Papers in ELF*, 1: 42-57.
- ⑬Yano, Y. (2012) World Englishes and English as a Lingua Franca: A personal observation. In

Waseda Working Papers in ELF, 1: 24-32.

- ⑭Murata, K. (2011) Voices from the Unvoiced: a comparative study of hidden values and attitudes in opinion-giving. *Language and Intercultural Communication*, 11, 1: 6-25.

[学会発表] (計 18 件)

- ①Murata, K. & Iino, M. (2015) From marginality to the mainstream: evolving identities through four-year English-medium instruction and study abroad experiences, Paper presented at AAAL 2015. March 22. Toronto (Canada)
- ②Iino, M. & Murata, K. (2014) Japanese students' changing views of communicative competence through ELF experiences. Paper presented at the ELF 7 International Conveerence. September 6. Athens (Greece)
- ③Murata, K. & Iino, M. (2014) A Journey through euphoria to marginality, and eventually to the mainstream—An ELF experience. Paper presented at the ELF 7 International Conference, Athens, Greece. 5 September.
- ④Iino, M. & K. Murata (2014) Evolving identities and co-constructing an ELF (English as a lingua franca) community in an English-medium academic context. Paper presented at Sociolinguistic Symposium 20. June. 18. Jyvaskyala (Finland)
- ⑤Terauchi, H. & T. Araki. English or other skills? Difficulties encountered in business meetings. Paper presented at the 3rd Waseda ELF International Workshop. 1 March 2014.
- ⑥Tsuchiya, K. (2014) Comparing articles of an ELF-based and a native-norm-based journal using a small-scale corpus. Paper presented at the 4th Waseda ELF International Workshop, Tokyo, November 2014.
- ⑦Tsuchiya, K. (2014) Why bother switching to ELF?: Analysing code-switching in a group discussion in a CLIL class at university in Japan. Paper presented at the 3rd Waseda ELF International Workshop, 1 March 2014.
- ⑧Yasukata, Y. (2014) What is 'correct' English? -Nonnative creativeness and its pedagogical implication. *AILA World Congress*, Brisbane, Australia. 11 August 2014.
- ⑨Murata, K.(2013) Conservative academies versus practical industries: discrepancies in understanding ELF communication. Paper presented at the ELF 6 International Conference, Rome, 6 September 2013.
- ⑩Murata, K. & Iino, M. (2013). Conflicting identities in the transitional period between EFL learners and ELF users. Paper presented at the ELF 6 International Conference. 6 September 2013, Rome (Italy).
- ⑪Harada, T. (2013) Effects of early language learning on speech perception: From an ELF perspective. Invited talk at the 2nd Waseda

ELF International Workshop, Tokyo, Japan.
1 March, 2013.

- ⑫ Sawaki, Y. (2013) A review of large-scale academic English tests from an ELF perspective. Invited talk at the 2nd Waseda ELF International Workshop. 1 March 2013.
- ⑬ Backhaus, P. & Murata, K. (2012) English as a Lingua Franca in Tokyo's Linguistic Landscape. Paper presented at Sociolinguistics Symposium 19, Berlin, 22 August 2012
- ⑭ Iino, M. & Murata, K. (2012). 'We are jun-japan' – Dynamics of ELF communication in an English medium academic context. Paper presented at Sociolinguistic Symposium 19. August 24. Berlin (Germany)
- ⑮ Yano, Y. Advices and informations?: Language Changes Toward ELF Core. Paper presented at the ELF 5 International Conference, Istanbul, Turkey. 25 May 2012.
- ⑯ Backhaus, P. (2011) Traces of ELF in Japan's Linguistic Landscape. Invited talk at the 1st Waseda ELF International Workshop, 31 August.
- ⑰ Harada, T. (2011) ELF and future directions for SLA research. Invited talk at the 1st Waseda ELF International Workshop, 31 August 2011.
- ⑱ Sawaki, Y. (2011). Issues of Consideration on Developing ELF Assessment Criteria. Invited talk at the 1st Waseda ELF International Workshop, 31 August 2011.

〔図書〕(計 11 件)

- ① Murata, K. (ed.) (in press) *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts: Conceptualisation, Research and Pedagogic Implications*. London: Routledge. 261 頁.
- ② Murata, K. (ed.) (forthcoming) *Waseda Working Papers in ELF(English as a Lingua Franca)*. Vol. 4、Tokyo:Waseda ELF Research Group, Waseda University.
- ③ Backhaus, P. (in press) Attention, please! A linguistic soundscape/landscape analysis of ELF information provision in public transport in Tokyo. In K. Murata (ed.), *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts*. London: Routledge.
- ④ Iino, M. & Murata, K. (in press) Dynamics of ELF communication in an English-medium academic context in Japan from EFL learners to ELF users'. In K. Murata (ed.) *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts*. London: Routledge.
- ⑤ Sawaki, Y. (in press). Large-scale assessment of English for academic purposes from a perspective of English as a lingua franca. In K. Murata (ed.) *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts*. London: Routledge.
- ⑥ Terauchi, H. & T. Araki (in press). English or other skills? English Language Skills that

Companies Need: Responses from a Large-Scale Survey. In K. Murata (ed.), *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts*. London: Routledge.

- ⑦ Tsuchiya, K. (in press). Analyzing Interruption Sequences in ELF Discussions. In K. Murata (ed.), *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts*. London: Routledge.
- ⑧ Yano, Y. (in press). The unmarking trend in language changes and its implications for English as a lingua franca. In K. Murata (ed.), *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts*. London: Routledge.
- ⑨ Murata, K. (ed.) (2014) *Waseda Working Papers in ELF*, Vol. 3. 168 頁.
- ⑩ Murata, K. (ed.) (2013) *Waseda Working Papers in ELF*. Vol. 2. 146 頁.
- ⑪ Murata, K. (ed.) (2012) *Waseda Working Papers in ELF*. Vol. 1. 80 頁.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.f.waseda.jp/murata/elf.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 久美子 (MURATA, Kumiko)
早稲田大学・教育・総合科学学術院 教授
研究者番号：10229990

(2) 研究分担者

矢野 安剛 (YANO, Yasukata)
早稲田大学・教育・総合科学学術院
名誉教授 研究者番号：00130857

飯野 公一 (IINO, Masakazu)
早稲田大学・国際学術院 教授
研究者番号：50296399

寺内 一 (TERAUCHI, Hajime)
高千穂大学・商学部 教授
研究者番号：50307146

土屋 慶子 (TUCHIYA, Keiko)
東海大学・外国語センター 専任講師
研究者番号：20631823

(3) 連携研究者

バックハウス、ペー ト(Backhaus, Peter)
早稲田大学・教育・総合科学学術院
准教授 研究者番号：40582888

原田 哲男 (HARADA, Tetsuo)
早稲田大学・教育・総合科学学術院
教授 研究者番号：60208676

澤木 泰代 (SAWAKI, Yasuyo)
早稲田大学・教育・総合科学学術院
教授 研究者番号：00276619

海外共同研究者：

Juliane House (University of Hamburg)
Ryuko Kubota (University of British Columbia)
Barbara Seidlhofer (University of Vienna)
Henry Widdowson (University of Vienna)